キューアンドエー

野村勇人社長

仙台で20年 伴走追求

DX分野 企業支援に挑む

トップに聞く

コールセンター運営などを手がけるキューアンドエー（Q&A）の野村勇人社長が、仙台市内で河北新報の取材に応じた。2005年の仙台進出から今年で20年。23年に仙台へ本店を移した背景や、得意とするデジタルトランスフォーメーション（DX）分野で今後、地元企業を伴走支援する方針を説明した。

―仙台拠点の設立から20年がたった。

「進出当時は営業部長として半年間ほど東京と仙台の間を行き来して拠点立ち上げを支援した。オペレーターは約70人ぐらいでスタートした。今振り返ればあっという間だったが、現在は1000人まで大きくなった。5年以内に2000人体制にするのが現在の目標だ」

のむら・はやと　東京テクニカルカレッジ卒。2002年入社。執行役員マーケティングサービス統括部長兼ソリューション営業部長、執行役員常務オペレーション本部などを経て21年常務オペレーション事業本部長。23年6月から現職。54歳。東京都出身。

―本店を仙台へ移した狙いは。

「東京と仙台でビジネスが回るようになれば、会社は二つの柱に支えられて強くなる。拠点は大阪や福岡にもあるが、仙台・宮城ほど地元の自治体や企業と連携がうまくいっている拠点がなかった。こうした点も決断の背景にある」

「社長になるタイミングと重なったが、地元の皆さんと自分たちが一緒に発展できる形をつくろうという思いだった。勢いで決めたところもあったが、私たちにデメリットもなかった」

―今後の展望は。

「地元企業1社1社のそれぞれに合う形で、伴走型支援を手がけていこうというのが一つのチャレンジだ。私たちの得意とするDX分野へは期待感も大きいと感じている」

「世の中にDXツールはたくさんあるが、標準化された導入方法があるわけではない。どの社も歴史があり、確立された社内ルールや仕事の進め方はまちまちだ。各社の現状や事情を聞き取りながら、地に足の付いた使い方を一緒になって考え出したい。ツールを導入したから終わりではなく、効率化や生産性の向上といった成果がきちんと出るまで、寄り添って支援するというのが私たちが目指すスタイルだ」

（樋渡慎弥）

河北新報　掲載日：2025年7月30日（水）朝刊6面　とうほく経済
＊河北新報社　無断複製転載を禁止します。